
乙女な主と一流のメイドな私

山田はな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女な主と一流のメイドな私

【Nコード】

N4646Q

【作者名】

山田はな

【あらすじ】

「僕は将来お父様と結婚する」実の父親に、そう爆弾発言をかましたのはわずか4歳の少年だった。息子であるゼンの将来を激しく心配した父親は、発覚した性癖の更生と隠匿を図るため、己の親友である執事に相談。執事は親友のため、生まれたばかりの自分の娘マリアをゼンの専属メイドにする事を約束した。残念ながらマリアの半生を捧げた努力は実らず、立派な同性愛者に成長を遂げたゼン。マリアはいつかゼンが更生してくれることを夢みて、今は彼の秘密を守るために奔走する。『乙女な軍人』ゼンと、苦勞が絶えない『

一流のメイド』マリアが、自国の王位継承をめぐる陰謀に巻き込まれていくお話です。

プロローグ

嫌味にならない程度に華美に装飾された客室。

壁紙から絨毯、家具、花瓶、壁に掛けられた絵画等、細部に至るまで厳選された一級品で調えられた部屋は、この館の主人の趣味の良さが窺える造りになっていた。

「うちの庭園は今、ジャスミンが一番の見頃ですの。小さくて、可憐で、わたくしの一番大好きな花です。でも、アスランお兄様は好きじゃないみたい。香りが強すぎるからかしら・・・ゼン様は、花はお嫌いですか？」

「嫌いじゃない」

「うれしい！殿方が好むものといえば、乗馬や狩猟、テーブルカードばかりと思っておりましたが、ゼン様はそんなことありませんのね」

優美な百合の花が彫りこまれた猫足テーブルを挟み、向かい合う華やかな一組の若い男女。

言葉少なく、短い返答と相槌を返すだけの青年に、少女は気分を害した様子もなく嬉しそうに話続けた。

（惜しい。そこで笑顔の一つでも見せることが出来れば、一発なのに！）

一応順調な二人の雰囲気にな堵しつつも、一押しも二押しも足りない主人に、私はそつとエールを送った。

頑張れゼン様！今度こそお見合いを成功させ、私とお館様を安心させて下さい！

皆様始めまして、こんにちは。音声なし、字幕のみで失礼いたします。

私の名はマリア。

あちらで少女と一緒に居る顔面筋肉停止男、ゼン・ユーリウス様にお仕えする、幼馴染兼メイドでございます。

現在私は、無駄に広い客室の壁際に立ち、本日のゲストである伯爵家の令嬢エリザベス様と、ゼン様とお見合いを全力でサポートしているところです。

「——それから、実はわたくしの初恋の相手はお父様なんです」

もじもじしつつ、「お父様には秘密にしてくださいね」と、小声で呟くエリザベス様。

天使です！天使がここにいます！！

かぁ、と染み一つない白い頬をピンク色に染め、恥じらう姿は同じ女性の私から見ても、キュートで思わず抱きしめたくなる可愛らしさでした。

——が、

「それは奇遇だな。俺の初恋の相手も父上で、母上がライバルだった」

変態です。変態がここにいます。

顔の造作がどんなに良かろうが、一般の成人男性よりはるかに身長があり、筋肉質で体格のいい男が無表情で告白する姿に、たとえ自分の主人兼幼馴染であつたとしても、形容しがたい程の嫌悪と薄ら寒さを覚えました。

「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」

（ああ、またやってしまいましたねゼン様）

弾んでいた（？）はずの会話がピタリと止んで、訪れる無言の間。甘やかな空気が急速に萎み、冷めていった。

まあ、あんな変態発言が飛び出せば当然ですよ。分かります。

ここにきて、お見合い相手が始めて挨拶以外の長文を喋ったかと思えば、まさかのホモ発言。

私ならトラウマになる。

「コホン、失礼します。ゼン様、お茶のお代わりは？」

「貰おう」

「エリザベス様、エリザベス様のカップも中身が空の様ですが、お茶のお代わりはいかがですか？」

「・・・」

「エリザベス様？」

もしもし？聞こえてますかー？

今までずっと喋っていたエリザベス様が黙れば、この部屋に満ちるのは沈黙のみ。

たあとで叱責を受けようとも、時として主人達の会話に割って入り、主のフォローをするのが、一流のメイドである私の務め。

何事もなかった様に澄ました顔で近づき、この期におよんでまだ自分の失態に気づいていないゼン様のカップに怨念を込めながら紅茶を注ぐ。

慎重に様子を観察しながら、エリザベス様にもお伺いを立ててみるが全く返答がない。

「エリザベ・・・」

怪訝に思っ て顔を覗き込めば、エリザベス様は目を見開いたまま気絶していた。

繊細なお嬢様には刺激が強すぎたみたいです。

「オメデトウゴザイマス、ゼン様。これで記録更新ですね」

「何故だ？」

「胸に手を当て、ご自分の今日の発言をふり返ってみて下さい」

「・・・。？分からないぞ」

少しは空気を読むスキルを身に付けてください。

あれ程、あれ程（大事な事なので2回いいました）余計な事は何も

言わず、相手がふる話に黙って頷いて下さいとお願いしたのに、私が言うことをちっとも理解していなかったんですね。

「後で一緒に反省会をしましょう」

申し訳ありませんお館様。

お館様と私で散々苦勞してセツティングしたお見合いでしたが、僅か半日でペアになってしまいました。

胃薬と水を用意して、後ほどご報告にあがります。

館の奥にある自室で、今か今かと吉報を待っている筈であるゼン様の父君に、心の中で合掌した。

ゼン・ユーリウス。

独身、24歳。

伯爵家の跡取り息子で、現役軍人である彼の36回目のお見合いは、こうして幕を閉じたのでした。

第一話

あれ？

あそこで立って居るのは、

「父様」

早朝。

体を鍛えることを己のライフワークにしているゼン様に付き合って、まだ薄暗い廊下を歩いていたら、既にきっちり執事の制服に身を包んだ父のトラントに会った。

「おはようございますゼン様」

「おはようトラント」

「おはようございます父様」

「おはようマリア。眠そうだな」

「す、すいません」

さすが父親。

密かにかみ殺した欠伸を見咎められて、私は縮こまった。

そうなんです。

ものすごく眠いんです。

実は昨日メイド仲間から貸してもらった、ミステリー小説『秘密探偵と始末屋』を読んでいて一睡もしていない。

あと少しだけ、もう少しだけと読んでいるうちに、気がつけば夜明

けを迎えてしまっていた。

とりあえず始めのさわりだけだからと、ベットに持ち込んだのが敗因に。

くっ。

自らの体調管理も出来ないなんて、一流のメイドとして不覚でした。

「トラントは今日も渋くて男前だな」

「ありがとうございます。ゼン様もとても魅力的でございます」

目の下に隈を拵えた私とは逆に、今日も絶好調なゼン様。

そんな主の賛辞を、さらりと涼しい顔をして受け流す父も、数少ないゼン様の秘密を知る一人。

もつと詳しく言えば、私をゼン様付きの専属メイドにした当事者の一人なのである。

時は遡ること20年前。

後に『白薔薇事件』と名づけられる、ゼンとマリアを結びつける切

欠となった騒動がユーリウス邸で起きていた。

「大きくなったらお父様と結婚する」

午後の暖かな日差しに包まれた屋敷の庭。春摘みのハーブティーを楽しんでいたユーリウス夫妻は笑顔で駆けて来た息子の一言に固まった。

「大きくなったらお父様と結婚する」

「父様と結婚する」

「父様と」

リフレインする息子ゼンの台詞。

——おい、お父様って誰だ？

・・・わたしだ。

——結婚したいだって？一体誰と？

・・・お父様とだ。

——さて、お父様って誰だ??

・・・わたしだ。

——それで、結婚したいだつて?? 一体誰と??

・・・お父様とだ。

たつぷり数十秒かけて思考の海に沈んだ後、ティグレ・ユーリウス伯爵は激しく頭を振った。

——否！

否。否。否。否。否。否。否。否。否。否。否。否。
断じて否。

『お父様と結婚する』なんて絶対にわたしの聞き間違いだ！

これは・・・これは、幼い息子から・・・母親へのプロポーズに違いない！！

「・・・」
「・・・」

いやいや、さて自分よ。現実を受け入れるんだ。

最近4歳になった息子のゼンは確かに流暢に喋るようになったが、まだまだ幼い。

『お父様』と『お母様』とを言い間違っ事ぐらいあるだろう。
よし。これに決定だ。

今のは言い間違え。他意はない！

ティグレの中で息子の台詞はいい間違えに決定した。

これは愛息子の無知故の純粋なプロポーズ。

そう考えれば何もそんなに驚く程の事じゃない。

男の初恋はほとんどが母親で、

わたしだって幼い頃、庭で摘んだ両手一杯の花を手に母親へ愛の告白をした覚えがあるじゃないか。

優しく母の肩を抱く父に向かって対抗心を燃やした頃を思い出し、感慨にふける。

自分が過去に経験した事に当て嵌めてみればなんて事はない。

ようやく気持ちに余裕が生まれたティグレは席を立ち、屈んでゼンと視線を合わせた。

「ゼン、よく聞きなさい——お母様とは結婚出来ないんだよ」

「お母様じゃありません。僕が結婚したいのはお父様です」

きつぱりと、そう言って目の前に一本の白い薔薇を差し出すゼン。

「！？」

白い薔薇はわたしが一番好きな花だった。

「でも、お父様とお母様が結婚して夫婦なのは知っています。だから妻に成るのは諦めるので、愛妾にして下さい」

「あ、あ、あ、あ、愛妾!？」

「はい。第二婦人でもいいです」

無邪気な声でとんでもない事を言ってくるゼン。

息子の本気を知った父は今度こそ氷ついた。

あ、愛妾なんて言葉、一体何処で覚えてきたんだ!？

親が決めた政略結婚ではあったが、わたしは妻のマリアンヌを愛している。

神に誓って婚約が決まってからはマリアンヌ以外に目をやった覚えはない。

信じてくれマリアンヌ!

——て、違うだろう!

親子は結婚出来ないと教える方が先のはずだ。

——て、それも違う!冷静に成れわたし!!

もつと根本的な部分で、そもそも男同士は結婚出来ないんだと言っべきだろう!？

いや、しかしこれは改めて教えるべき事なのか?

くそ!一体誰だ息子におかしな事を吹き込んだのは!？

「お父様?」

ひっ!？

た、助けてくれマリアンヌ!

援軍を求め、先程からずっと黙ったままの妻に目を向ければ、既に
気絶していた。

マリイー！！！？

「あの・・・お父様？」

「っ！？」

ティグレ・ユーリウス26歳。

17歳の頃から近衛兵として王の傍に仕え、何度も命を危険にさら
してきた。

腹を刺され、本気で死に掛けたことだってある。

だが、かつてこんなに得体の知れない恐怖を感じたことがあっただ
ろうか。

「お、お父様のストライクゾーンは年齢差10歳までだ！！」

曇りの無い瞳で見上げてくるゼンに、混乱してティグレが叫んだこ
の台詞は、今日の事件と一緒に嚴重に封印された。

白薔薇事件によって発覚したゼン様の性癖。

外聞を重んじる傾向が強い貴族社会で、古い歴史があるだけに、外にこの秘密が漏れる様な事があれば爵位剥奪上お家取り潰しの危機。進退窮まったお館様が相談した相手が、子供の頃からの親友であり代々ユーリウス家に仕えてきた父のトランドだった。

——分かりました。ユーリウス家の秘密は我々親子が必ずお守りします。

熟考の末、父が秘密を守るために打った手。それが当時0歳だった娘の私を、将来ゼン様付きの専属メイドにすることだった。

信頼のおける者をゼン様の傍に配置し、全面的にサポートする。

本来なら異性ではなく、学友も兼ねた同姓を宛がうべきなのだけでも、事情が事情。万が一道徳教育が失敗に終わったとしても、女の私ならゼン様に喰われる心配はない。そんな地味に女の尊厳を傷つける理由もあって、私はゼン様付きになった。

——『マリア、これからゼン様を頼んだぞ』

——『はい。マリアにお任せ下さい』

6歳になった私が、10歳のゼン様に仕えるようになって14年経つ。

「マリア、今日もゼン様を頼んだぞ」
「もちろん、お任せください」

年頃の女の子が変態ゼンさまのサポートをするのに不満が無かったわけじゃない。

今だってど突き倒してしまいたくなる事は沢山ある。
だけど、何だかんだいいながらも12年間もメイドを続けていられるのは、それが私の天職だからだろう。

第二話

愛が無くても結婚はできる。

自重しないゼン様のカミングアウトに、倒れるお嬢様を介抱すること数十回。

記憶隠蔽の腕も神の域に達してきた頃、ゼン様が言った。

「聞こう。俺には何が足りない？」

ゼン様宛の手紙を運んできた私が、部屋を退出しようとした所で呼び止められた。

珍しく難しい顔をしているから何かと思えば。

よっぽど前回のお見合い結果に納得出来ないらしい。

「正直に申し上げても？」

「許す」

とは言ったものの、殆んど完璧超人のゼン様に、致命的に足りないものなんて『女性を異性として愛せない』の一点のみ。

でもそれは本人が一番分かっていることなので、今更指摘する必要はない。

・じゃあ、他に女を落とす上でゼン様に欠けているスキルといえば・・

「失礼ながら、ゼン様はコミュニケーション能力が（著しく）不足しているかと」

「自覚はある」

いやいや、ないでしょ。どう見てもないから。

顎は机に片肘を着けた甲の上。

斜めに椅子に腰掛け、長い足を組んで気だるげに頷く姿は鼻眞面目に見ても、他人にアドバイスを求めている姿勢じゃない。

危うく喉元まで出かかったツツコミを、私は気合で飲み込んだ。

復唱。

私は一流のメイド。私は一流のメイド。私は一流のメイド・・・

そう。

私は一流のメイド。

一流のメイドは主人にツツコミなど入れない。

「大変結構です。自覚は克服の始まりですから」

内面の葛藤など表に出さず、ただ花の様に微笑むのみ。

それが一流のメイドである私の仕事なのだから。

「——では以上をふまえて、私がこれから読み上げる質問に答え

て下さい」

己を知り、それを人に分かりやすく伝える事で、コミュニケーション能力の向上に繋げる。

マリアによるゼンのための『人間関係の円滑な進め方』のレクチャーが一通り終わり、最後に復習を兼ねた簡単な質問表を読み上げる。

質問1・お名前はと年齢を。

「ゼン・ユーリウス。24歳」

はい正解です。というか、まず間違えようがない。

質問2・身分又は職業、もしくは両方を簡潔に。

「軍属。所属は王国治安維持部隊左軍、第一小隊副隊長。身分の方はまだ父上が健在だから無いが、問題が起きないかぎり、いずれは伯爵の地位を継ぐことになる」

「副隊長補佐ではありませんでしたか？」

「昨日辞令が下りた」

「それはおめでとうございます」

さすがゼン様、出世街道まっしぐらですね。後で急いで昇進祝いの手配をしなければ。

質問3・されて嫌なこと。

「嘘をつくのも、つかれるのも嫌いだ」

「ゼン様の信条ですよね」

「これは譲れない」

質問4・嬉しいこと。

「嬉しい・・・とは違うが。」

疲れて屋敷に帰って来た時、マリアに『お帰りなさいませ』と言われると安心する」

「あ、有難うございます・・・」

び、ビックリした！。

今のは新手のドッキリか何かですか！？

もちろん主人にそんな事を言ってもらえて嬉しくないわけじゃないけれど、ゼン様相手に一瞬でもドキツとしてしまった自分にOTLですよつ。

質問5・得意な事は？

「編み物」

「確かにゼン様のレース編みは素晴らしいですが、そこは剣術とお答え下さい」

嘘じゃないしね。

質問6・趣味は？

「恋占いと料理」

「料理だけでいいと思います。最近貴族のご婦人方の中で手料理が流行しているみたいですし、ゼン様ならギャップによる高ポイントが期待できます」

うん。

たとえば表情筋が死んでいても、顔だけは良いゼン様。エプロン姿は飢えたご婦人方に好評だろう。

質問6・休日は何をしていますか。又は習慣にしていることはありますか。

「休日の朝は、花をたっぷり浮かべた浴槽でゆっくり入浴をする」

うん？

質問7・最近読んだ本は？

「復刻版乙女の恋愛長編小説全12巻」

うん？

だんだん雲行きが怪しくなつて・・・

質問8・男の友情と女の友情（愛情でも可）、どちらか一方を取る
としたらどっち？

「状況にもよるが、条件が同じなら『男の愛情』」

ちよつ、おまつつ！？

質問9・好きな人のタイプは？

「容姿には拘らない。顔よりも行動力と決断力がある男に魅力を感じる。欲をいえば俺の隣に立った時に身長差がでないの者がベストだ。自分より背が低い者が相手だと、抱きしめて貰う時に都合が悪いからな。理想は——」

はいアウトー！

急に饒舌に語りだしたゼン様。

恋に恋する乙女のように、並々ならぬこだわりがあるらしい。

「ゼン様。交際相手に長身を望む気持ちは分かりますが、この場合『好きな人のタイプ』とは大抵“異性”を指します。その事を踏まえてお答えください」

「しかしこの場合『好きな』が示す感情は“親愛”ではなく“恋

愛”だろう。

つまり性的興奮を覚え、恋愛感情に繋がる可能性がある要素を上げる事を求めた問いだ。違うか？」

「・・・違います」

「俺は女性に対して恋愛感情は湧かない。マリアは俺に嘘をつけというのか」

不満の色を浮かべながら、断固拒否するゼン様。

ああ言えばこう言う。私は思わず米神を押さえた。

理責めで負けない自信のある私も、今回の主の言い分には（言っていることは限り無く残念な内容ではあるが）分があるように思えるのだから、始末が悪い。

折れるつもりのない主の意思を酌み、打開案を提示する。

「分かりました。ではこの質問には一言『ない』とだけ」

好きな女性のタイプは無し。（裏訳：男が好きだから）

まず裏の意味に気づく人はいないでしょう。

受け取り方によっては、来る者拒まずの節操無しの答えに聞こえてしまうけれど、この際仕方がない。

第一無理にゼン様の意思を曲げさせる程重要な質疑でもない、この時の私は思った。

・・・後にこの判断をマリアは激しく後悔する事になるのだが、それはまた別の話である。

——『ちなみに、ゼン様より上背がある殿方はそうそういらっしやらないかと・・・』

——『あくまで理想だ』

——『さようで御座いますか』

第三話

「お帰りなさいませзен様」

「ただいま」

お昼過ぎ。

今日のお勤めは午前だけだったゼン様が、城から帰宅。挨拶もそこそこに早足で自室に直行した。

（——あれ？）

後に続きながら、僅かに感じた違和感。

相変らずの無表情から感情の機微を読み取ることは出来ないけれど、明らかに普段と違った様子に、私は内心首を傾げた。

今日は、午後から急ぐ予定は入っていないはずである。
なのに、一体何を急ぐ必要があるのか。廊下から自室へと向かう背に、普段から無駄に垂れ流されている余裕が感じられない。

小走りじゃないと追いつけない速度で、黙々と先を行くゼン様。

いつもなら、長身の自分と、相手とのコンパス差を考慮し、歩調を合わせて歩く芸当くらい無意識の内にやってみせるゼン様にしては、珍しく配慮が欠けている。

私は長い廊下を離されない様に注意しながら、主の様子をじっくり観察した。

- ・ステップは踏まないものの、心なしか、軽い足取り。
- ・やや早足ではあっても、響く足音は軽快で、苛立った雰囲気のも

のじゃない。

機嫌が悪いわけではなく、むしろ機嫌は良いようだ。

———ということは、何か良いことでもあったのかな。

益々珍しい主の様子に、湧き上がる好奇心を押さえつけ、私はあくまでポーカーフェイスを維持。

上機嫌の理由を問いただすなんて、不躰なまねはせず、普段通りに扉の前に立って開けると、先にゼン様をお通ししてから、既に玄關で受け取っていたコートにブラシをかけてクローゼットへ。

コートと一緒に受け取っていた皮の手袋には、布をあて軽く表面の汚れを拭ってからタンスの引き出しへと仕舞った。

次に腰のベルトから外された長剣を書斎机の後ろの定位置に立て掛け、仕事着である制服を脱がせ、代わりに出てきた普段着を渡して、無言で着替えを手伝う。

（ちなみに、本日の召物は褐色の肌によく合う深緑色の詰襟。私は密かにこの色が一番ゼン様に合っていると思う）

「聞いてくれマリア」

「どうかいたしましたか？」

待つてました。

一連の作業が終わった頃を見計らって、始終無言だったゼン様がようやく口を開いた。

ゼン様専属のメイドであり、幼馴染であり、主の秘密を知る一握りの人間である私は、（自分で言うのも痴がましいが^{おこ}）よき相談相手でもある。

無理に聞き出さなくても、大抵のことは話してくれた。

「恋文を貰った」

「それはおめでとうございます。一体どなたからですか？」

上機嫌の原因は、恋文？

『恋文』別にそれ自体は別段驚くべきことじゃない。

ゼン様の顔の造りだけは百点満点。私のサポート（と言うな名の隠蔽）が完全には行渡らない館の外では、ボロが出ない様に無口無表情のストイックで通っているので、彼の秘密を知らないお嬢様方から恋文を貰ってくることなんて、しばしば有る。
ファンレター

・・・いや、でもゼン様が恋文を貰って、こんなに機嫌が良いのは本当に珍しいか。

よし。

もし家柄がつりあって、人間性に問題がなければお館様にご報告の上、許可が下り次第即効お見合いをセッティングをしなければ。

余談ですが、今最もお勧めなのは、ウーндеキム家のジアンヌ様。

肖像画を拝見しましたが、金髪の巻き毛で、お人形の様な容姿。噂によると性格も控えめで、なかなかの淑女だとか。

他にも多数リストアップしているけれど、恋文の相手が私が知っている（目を付けている）お嬢様なら・・・

「ラーディン・クーアだ」

はいー？

「申し訳ありません、もう一度お願いします」

その方なら存じております。

けど、

あまりにも予想外な人物の名に、脳が該当者の承認を拒否しました。
再入力を要求します。

「ラーデイン・クーアだ」

——ですよね。

一語一句の違いもなく、同じ回答、真にありがとうございます。

主が嬉しいと私も嬉しいなんて、爪の先程でも思った過去の自分よ、
さようなら。

今はゼン様、貴方の全てが小憎らしい。

「・・・ラーデイン様といえば、御髪と瞳が宵闇色で、“黒の雷”
の二つ名を持つあのラーデイン様ですよね？」
「そうだな、そのラーデインだ」

通りで嬉しそうな筈だ！

私としたことが、完全にノーマークでしたよ。

うん、いや、でもしょうがないよね。

だって、

その人はゼン様の同僚で・・・

——男—— なんだから!!

ラーディン・クーア。

たとえ彼の名を知らなかったとしても、国内で戦場を駆ける“黒の雷”の名は小さな子供でも知っている程有名だ。

そんな有名人と私は多少の面識があった。

使いで何度か城にいるゼン様を訪ねた時に偶然知り合い、彼自身もこのお屋敷に、仕事の緊急連絡や所用で訪ねてきたことがある。

ラーディン様はゼン様の同僚で、同じく王国治安維持部隊左軍、第一小隊所属。商人上がりの貴族クーア家の三男坊。得意の棒術で、実力主義で有名な第一小隊の隊長に引き抜かれたらしい。

私を知る限り、ラーディン様は同年代のゼン様を一方的にライバル視していて、友好的な関係だったとはいえない。

何故今更？

これまでとっていた挑発的行動や態度は『実は愛情の裏返しだったんだ！てへ』的なパターンでしょうか。

・・・許すまじ。

うおおの〜れ〜、ラーディン様——否、貴様に敬称など不要！

ラーディンの野郎おお!!!

うちの^{ゼンさま}変態を誘惑するとは、どういう了見ですか!?

なにが黒い雷だ!調子にのるなよっ!!

貴様にはキングオブ変態の称号をくれてやるわっ!!!!!!!!!!

「——あ、マリア?大丈夫か?」

「あ、はい!?すみませんゼン様」

「顔の形が崩れていたぞ」

「・・・(本^{マジ}気で余計なお世話です)」

不思議そうにこちらを覗きこんでくるゼン様からは、微塵も悪意は感じられない。

本当の事しか言わないだけに、貴方の一言は容赦なく心をえぐりますよ。

くっ、私の目が黒い内はゼン様に最後の一線は渡らせませんからね。

ラーデイン・クーア抹殺計画を一時中断し、私は素早くメイドの仮面を装着した。

「これから出かけてくる」

「・・・どちらへ?」

いそいそと外出の用意をし始めるゼン様。
ものすごく嫌な予感がした。

「ラーデインとデートだ」

「私も付いて行きます」

絶対に阻止しなければ！！

手と手を取り合う世紀の最強ホモカップル。
歩く公害だ。

「断わる。小さな子供じゃないんだ、保護者同伴でデートなんかせん」

こんな自分より大きな子供、丁寧にお断わりさせて頂きます。
本当は私だって主のデート？に付いて行くような野暮なまねしたくない。むしろ心の平穩のためにも、今聞いた話は綺麗さっぱり忘れて家でお茶を啜っていたい。
けど、

「マリアは絶対に付いて行きます」

私はゼン様のメイドなのだ。

たとえゼン様の幸せが、ラーディンとのゴールインにあらうとも、自分の存在意義がホモカップルの誕生を許さない。

「絶対に、か」

「絶対に、です」

「・・・」

「・・・」

沈黙。

ゼン様の纏う空気が一段重くなった。

ま、負けるもんか。

人には誰にでも譲れない瞬間がある。

まさに今がその時なのだ（こんなタイミングで人生の岐路を語る自分に凹むけれど）。

何が何でも付いて行きますよ。

——そして、徹底的に邪魔をする！

ゼン様の琥珀色の瞳を真っ直ぐに見つめ、

「心配なんです」

「置いていこうとしても駄目ですから」

「お側にいさせて下さい」

主を心配する健気なメイドを全面に押し出し、圧力に対抗する。

ファーストインパクトと強すぎて、全く疑いを持たなかったけれど、冷静になって考えてみれば、あのラーデイン・クーアからの恋文なんて怪しすぎる。

ゼン様の秘密を嗅ぎ付けて、主の評判を落としいれようとする罠かもしれない（むしろ罠であって欲しいような・・・）。

（万が一本気だったとしても、二人の仲を応援することは出来ないのだけれど）

どちらにしろ、今の浮かれた状態のゼン様を、野に放つわけにはいかない。色々と危険だ。

絶対に付いて行って潰そう・・・もとい、お守りしなければ。

数十分。実際には数分だったかもしれない。

はあ、と唐突に聞こえた深い溜息と、伏せられた琥珀色の瞳。

勝った。

その瞬間私は自分の勝利を確信した。

「分かった、許す」

「ありがとうございます」

時間制限のあるゼン様と同行の許可が下りるまで、じっくり話し合
うつもりでいた私とでは最初から勝負にならなかった。

「すぐに出かける準備をしろ」

「只今」

こうして、私は同行の許可をもぎ取った。

第四話

王都の貴族街を出て、外周街を少し外れた位置にある開けた丘。したまち

上流階級のマダム御用達のお洒落なカフェテリアでもなく、税金をどっさりつぎ込んで整備された公園でも広場でもない。見渡すかぎり草、木、虫、草、木、虫、背後に岩、たまに蛇も出ます・・・の何もない所。

健全な若者の逢引にはまったくそぐわない、そんな場所に私達はいた。

—— 2時間以上も前から。

「なかなかいらつしゃいませんね」

「そうだな」

「・・・待ち合わせの場所はここで間違いないのですよね」

「間違いないな」

「デートをするには些か斬新な場所かと思うのですが」

「人目に付かない場所で会いたいからと、この丘を指定してきたからな」

「・・・・・・・・はい？」

ヒトメニツカナイバシヨ？

ひとめにつかないつかいない……

人目に！？

「ひ、」

「（火）？」

「ひひひひひ、人目に付かない場所ですってえええーっ！？」

「！」

何考えているんですかっ！？

何のこのこと相手の誘いについてのっているんですかっ！？

何でそんなに危機感がないんですかー！っ！？

もし主の願望通り、ラーデインからのお誘いが正真正銘のデートの申し込みであれば、世間体を考え隠れてひっそり会うつくらいおかしなことじゃないですよ！

なにせお互い成人していて、社会的に高い地位にいるのだし。

けれど、外で会って話をしたり、連れ立って歩くくらい二人は同じ部隊に所属する同僚なのだから、取り立てて不自然ではない筈で。

それを態々こんな中心街どころか外周街から外れた森の奥に呼び出すなんて明らかに普通じゃない。

怪しい。怪しすぎます。

もう、これでもかって云うほど罌の香りがプンプンするのに、何故呑気にデートデートと浮かれていられるんですかゼン様はっ！？

「帰りましょう」

「大声で叫んだかと思えば・・・いきなりどうした？ああ、トイレか」

「違います。そもそも二時間も待って、現われない方を律儀に待つ必要なんかありません」

ゼン様に恋人が出来ないのは、デリカシーの無さも原因かもしれない。

「問題ない、約束の時間は半夜の刻だ」

「半夜の刻って！？」

おもいつきり深夜じゃないですか！

輝く太陽は正午を過ぎたとはいえ、余裕で地平線の上。どう甘く見積もっても約束時間まであと9時間以上はある。

問題大有りですよ。

「もしかして・・・」

——『悪い、待ったか？』

——『全然、私も今来たところ』

『——馬鹿野郎、体が冷えてる』

（鼻の頭の赤くしてはにかむ少女をぎゅっと抱きしめる青年）

『あつ・・・』

〈乙女の恋愛指南書第2章より抜粋〉

みたいなシチュエーションを狙って・・・」

「よく分かったな」

「ゼン様あなたのメイドですから」

「そうか」

「そうです」

そんな乙男オトメンの願望を叶えるために、客観的に見て獲物ラーデインが罠にかかるのを物陰でじっと待つ狩人ハンターそのものだとしても、後9時間以上私達は彼を待たなければならぬらしい。

理不尽だ。

9時間以上も（何度だって言いますよ！）ラーデインを血祭りに上げる想像だけで過ごすには余りにも非生産的すぎる。

せめて色々と準備が出来ていればと。急かされ慌てて屋敷を出てきたことを後悔した。

「トイレを我慢するのは体に悪い、俺は大丈夫だから先に帰るとい

い」

「帰りません。こんな所にゼン様を御一人にできるはずがありません。そしてメイドはトイレに行かない生き物ですので、その御不浄ネタはどうぞ引っ込めて下さい」

追っ払われてなるものですか。

溜息の一つも漏らしていないのに、敏感に空気を察した主をジロリと睨みつける。

「マリアが忙しいのは知っている。無理して俺に付き合うことはない」

「なっ！？無理なんかしてません！」

「しかし退屈だろう？」

「！！」

主の心無い一言に、鈍器で頭を殴られた様な衝撃が襲った。

「マリア？」

「っ・・・」

ゼン様は御自分が仰った言葉の意味を理解されていないのだろう。

黙々と感情の読みにくい瞳で見下ろされ、情けなさや悔しさで、俯きながら唇を噛んだ。

——『無理して俺に付き合うことはない』

これは酷い侮辱だ。

とんでもない主の勘違いに目の前が真っ赤に染まる。

「私はっ——」

開きかけた口を閉じる。

必要ありませんか？

ゼン様にとって側に控えるには足りない存在ですか？

確かに私は幼い頃からゼン様の言動に振り回され、苦勞の耐えない日々を送っています。

狂信者じゃないんだから、不平や不満だって沢山あります。でも面倒だなんて思ったことは、一度だって無いんです。

夜になれば冷えるからと氣遣われても、顔を上げることが出来ない。外出用のガウンの端を握り黙ってしまった私に、普段より数段易しい声音で帰る様に促すゼン様。

ゼン様は何も分かっていない。

「ゼン様が関係する事より、大切な事なんてありません」

やり残してきた仕事なんか大した問題じゃない。

憂鬱な気持ちになったのは、事前にこんな何も無い場所に長時間滞在すると分かっていたれば、主が不便を感じ無い様に、色々と準備をしてきたのにと悔やんだだけで。

「マリアはもつと自分の……いや、いい。では何をそんなに怒っている」

「怒っておりません。私は……心配しているんです」

「心配？何も心配する事などないだろう？」

「ば、本気で言ってるですか!？」

流石の私もメイドの仮面が一瞬剥がれかける。
沈んだ気持ちも一瞬で吹き飛んだ。

ああ、もう!!この人はーっ!本当に何にも分かってない!

「そんな時刻に御一人で殿方とお会いするなんて、危険だとは思わないんですか!」

危機感無さすぎです!

社交界にデビュー前の少女だって、ゼン様より警戒心を持っていますよ!

一流のメイドは一時休業して、主にキャンキャンと怒鳴り散らす。
思慮深く優しく嗜めるなんて甘っちょろい方法でゼン様を守れないなら、口うるさい小姑にだってなってみせますよ!

「危険だなんて・・・マリアは大げさだな」

らしくない私の剣幕に、驚いた様にほんの少し目を見開いて、それから口の端に苦笑を浮かべるゼン様。

標準装備の無表情でもなく、眉間に皺を寄せた威圧感たっぷりの魔王モードでもない。今日は沢山主の珍しい表情を見る日だ。

「俺達は互いにゆっくり関係を深めていくつもりだ」

そ・う・じゃ・な・く・て!

恋は盲目といいますが、もしこれがゼン様を陥れる罫で、ゆっくり仲を深める前にぐっさり刺されるかもしれないなんて、どうして考えないのか。

「私はゼン様の身の安全を心配しているのです」

「心配してくれるのは有り難いが安心しろ、俺は身持ちの固い方だ。すぐに体を許したりはしない」

「当然です！と、そうではなくてですね、私は万が一・・・ラーデインはそんな男じゃない」

その根拠の無い自信は何処から！？

その場で頭を掻き毟りたくなった。

どれだけフィルターをかけているんですか。

ラーデインはたしかに姑息な手を好む男ではありませんが、ああ見えて目的のためには手段を選ばない男ですよ。

「ゼン様がお強いのは充分承知しておりますが、絶対に怪我をしないとはかぎらないでしょう」

「そんなマニアックなプレイはしない。まずは手を繋ぐことから始める」

「ありえません。幼年学校に通う児童だって、告白から10秒でキスまでいきます」

「それは・・・末恐ろしいな」

最近のお子様は皆早熟ですからね。

「第一、こんな人気の無い所に呼び出す様な相手が、本当に手を繋ぐだけで済まずと思っているんですか？ゼン様は夢の見すぎです。恋愛とはもつとドロドロのグズグズで、ぐっちゃんぐっちゃんのメ

「チヨメチヨです」

「ま、マリア？」

「男は皆飢えた狼です。性欲さえ満たせられれば、相手は誰でもいいんです。隙をみせればガブリと食べられてしまっんですよ」

「ら、ラーデインは別だと」

「甘い！三日前にラーデイン様が城の下働の女性を連れて花街に消えるのを見ました」

「何？浮気か・・・俺という恋人がいながら」

ラーデインはまだゼン様の恋人ではないとか、そんな事実はこの際脇においておく。

「男という生き物は口で『好きだ、愛してる、君だけだ』と言っているけど、三歩も歩けば別の女性に『好きだ、愛してる、君以外いない』と見境無く迫って回る節操のない生き物なのです」

「マリアの考え方もかなりの偏りがあるように思えるのだが」

「と、とにかく私が言いたいのは、万が一が起きてからでは遅いってことです！！」

途中で色々脱線した気もするが、とにかく私が言いたいのはそういう事なのだ。

分かって頂けたらどうか・・・。

第四話（後書き）

主人公がゼンさんと一緒になって脱線するとツツコミ要員がない・
・。

前回からだいぶ期間が空いてしまいましたが、暴走する二人のツツ
コミ役を登場させるため、出来るだけ早く次回の更新をできるように
頑張ります。

第五話

結論から申し上げますと、ラーデインは現れませんでした。

延々待つ事合計14時間以上。

ものの見事にすっぱかされた私達は、東の空が白み始める前に帰宅。

ゼン様に完徹で一睡もしていないのだから、本日のお勤めはお休み下さいと申し上げても、首を横に振るだけで聞き入れてもらえず。始終無言のまま、素早く朝食を済ませると制服に着替え登城されたのでした。

若干不穏な空気を滲ませながら……。

「御可愛そうなゼン様……」

期待が大きかっただけに、さぞや残念だったでしょう。

お側を離れてしまうことに些か不安はありましたが、女の身では用事も無いのに職場まで付いて行くことは出来ません。

奴も他人の目がある城内で騒ぎを起こすことは無いでしょう……
たぶん。

私的には当座の危機を回避出来たことに安堵しておりますが、主の気持ち pensando と思うと胸が痛みます。

意味深な誘いをかけておいて、まさかのボイコットとは流石の私も読めませんでした。

もし私がムキムキのマツチヨだったら、今直ぐラーディンを見つけたし、尻の穴から手をつ突っ込んで奥歯をガタガタ言わせてやるのに。

「役に立てなくて御免ねマリア」

「気にしないで、他を当るから。それよりクツキーご馳走様、キャロルの店のお菓子は評判がいいから、きっとゼン様も喜ぶわ」

外周街したまちの表通りにある御菓子屋の裏手口。

申し訳なさそうに眉尻を下げる少女に、私は笑顔で貰ったばかりの包みを掲げてみせた。

私がキャロルと呼んだ少女の父親が経営する御菓子店は、庶民に手が届く比較的安価なお菓子から、金持ちを相手にした高価な御菓子まで幅広い客層の商品を扱っていて、毎月最低一つは新商品を発表する。目新物好きの貴族の中で密かに人気上昇中の店だ。

当てが外れ、ここに寄った本来の用件は解消されなかったが、発売

前の新作のお菓子をお土産に持たされれば無駄足だったとは思えない。

「マリアの御主人様は本当に甘い物が好きなのね」

「以外と可愛いところがあるでしょう？でも秘密にしてね。私が喋ったって知られたら怒られちゃうから」

「あははっ、りょーかい。その代わり、気に入ってもらえるように売り込んでおいてよ！うちのお菓子が、ユーリウス家に卸されているって成れば、箔が付くからさ」

「ええ任せて」

私はニツコリ笑って、布石を打つ。

些細な事だろうと、外で主のプライベートを漏らすメイドは三流以下。

女の内緒の約束など蜘蛛の糸のように脆い。

あえて噂をばら撒き情報を操作するのが、一流のメイド。

隠れ甘い物好きの設定は、女の子に親近感を持たせるための技^{テク}。

表情の変化に乏しく、口数の少ないゼン様は硬く冷たいイメージを持たれがちだ。

ギャップ萌えで、少しでも親しみ易さを上げておくことは、主のマインスにはならないだろう。

「それじゃあ私もそろそろ店番に戻らなくちゃ。彼のことでは何か分かったら教えるね」

「ありがとう。でも程々でいいから、彼氏に妬かれない程度に優しく」

「もう！マリアったら！」

またねと、別れて次の目的地に向かう。
このペースだと後3件は回れそうかな。

「・・・はあ、ここもハズレ」

あれから4日、ラーデインは忽然と姿を消した。

何も言わないゼン様にそれとなく探りを入れてみてれば、例の一件の翌日から一度も城に出仕していないらしい。

無断欠勤を心配した同僚が一人暮らし用に借りている部屋に様子を見に行ったが、部屋は無人。大家さんに訊ねてみても何日も前から帰っている様子がないとか。

一体何処に行ったのか・・・。

私自身も何件か情報通の友人の元を訪ねて回ったが、収穫はゼロ。
影も形も見当たらない。

実家に帰省している線は薄い。家との折り合いが悪くて軍人になつたと、偶然本人の口から耳にしたことが有る。

失踪、誘拐、事件、事故に巻き込まれた・・・もしくは借金取りにでも追われている、とか？

冷たいかもしれないが、死んでいるならまだいい。死人は生者を脅かしたりはしないから。

生きて面倒な事件に巻き込まれているのなら、主絡みでなければ正

直に言つて関わり合いたくない。

（単純にゼン様の報復を恐れて、何処かに隠れているならいいんだけど・・・）

一度交わした約束を破ることを非常に嫌う主は約束を反故にした者に対して容赦がない。

理由如何によつて、明日の朝日を拝め無いほどボコボコに制裁は下される。

まあ、黙つてやられるほどラーディンも弱く無いはずだが――。

――え？

ザツと、黒い人影が現れたと思つた瞬間、あっさりと路地裏に引き摺り込まれた。

「きゃっ！？」

もう絶対に考え事をしながら歩くのは止める！
どさりと持っていたクッキーが落ちる音が、遠くで聞こえた。

「おっと、悪いが大人しくしてもらおうか」
「っ！？」

捕らえられ、お決まりの台詞が耳元ど囁かれると、背筋がぞくりと泡だった。

（意外に良い声・・・じゃなくて！そう言われて大人しく従うとで

も！？)

我武者羅に暴れてやろうと見上げれば、犯人と目が合う。

「――へっ？」

驚いたのは私を捕らえた人物も同じだったようで、同時に間抜けな声が漏れた。

宵闇色の髪に瞳。“黒の雷”ラーデイン・クエア。

ゼン様とは違った野性的な魅力を持つ顔の造作は整っていて、一度見れば忘れない。

探し人とのまさかのエンカウント。

「あなた！？」

「お前は『お見合い婆のマリア』！」

「ば、婆とは相変わらず失礼ですね！せめて『愛のキューピットマリ
アちゃん』と呼んで下さい！というか、呼べ」

口を押さえる手の力が一瞬緩んだ隙に素早く外して文句を言う。

『愛のキューピットマリア』『宿木のマリア』

日々、主のお見合いをセッティングしては失敗のくり返し・・・お見合い回数が増すにつれて、夢碎かれ不幸になる女性が続出。アフターケアの一つとして別の男性を紹介したのが切欠で。

より良い嫁を求め、徹底的に相手の家柄、好み、性格、嗜好、趣味等を細かく調べる私は、主が見合いに失敗する度、お詫びに豊富な人物データを元に相応しいパートナーを探し出しては、何組ものカップルを誕生させた。

気がついた時には、肝心の主は未だ未婚にも関わらず『愛のキューピット』の二つ名を頂戴していた。

「あんた前に会った時と性格変わってないか？」

「先日私の中でラーデイン様の株が大暴落しました。よって公の場を除いて、今後ラーデイン様に敬称並びに敬語は使用されません」

「・・・まあ、いい。堅苦しいのは嫌いだしな。それより誰だか知らねえが、俺の居場所を聞いて回っているようだと思えばあんただったとはね」

「・・・」

「それで？何故コソコソと俺の周りを嗅ぎ回ってる？ゼンの野郎が何をあんたに命令した？」

「嗅ぎ回ってなんか・・・」

「いないとでも？」

「っ！」

逃げられない様に腰にがつちり回された腕が更に引かれ、ぐっとラーデインとの距離が縮まる。

一つの嘘も見逃さないためか、相手の息がかかるほど近くに覗き込まれ、不覚にも体の熱が増した。

夜の闇を溶かし込んだ色の瞳に、不安げな表情をした私の姿が映る。早くなった鼓動を悟られたくなくて、必死にラーデインとの間に隙間を作ろうと腕を突っ張る。

今私達の体勢を第三者に見られたとしたら、きっと口付けを交わす

恋人同士に見えることだろう。

・・・こいつと恋人同士。

——冗談じゃないわ!!

「・・・く」

「ん？どうした、いまさら怖がったって・・・」「臭い」
「・・・」「へ？く、臭い？」

「だ・か・ら“臭い”って、言ってるんですよ」

ぽかんとした表情のラーディンを見つめ、はつきり言う。

「体臭のことです」

アイロンどころか洗濯もしていないだろう皺の寄りまくった地味な詰襟に視線を投げ、大げさに眉を寄せてみせると、ビクンとラーディンの肩が跳ねた。

（かかった!）

「全体的に臭いです。悪臭がします。何日お風呂に入っていないんですか、せめて歯ぐらい磨いて下さい」

「ばっ、馬鹿野郎！俺だって好きで臭い訳じゃない！こんな命令がなけりゃあ、今すぐ家に帰って風呂に入りたいんだ！でも歯ぐらいは毎日磨いてる！」

4日ぐらいなんだ!と。

そう言いつつもやっぱり口臭が気になるのか、ラーディンは己の口に手を当て私から僅かに距離をとる。

「ええっ！？本当にお風呂に入っていないの！？しかも4日も！？」

弛んだ腕の拘束に目論みは成功したが、演技じゃなく本気でドン引いた。

「うるせー！軍事演習中なら一週間ぐらい軽く風呂どころ水浴びだつてしないことがざらだ！」

「不潔！近づかないで！」

「なっ！？」

さらに二人の間に距離が出来た。物理的にも精神的にも。

「ち、違う！俺は不潔じゃないっ！！」

若い女性わたしに生ゴミ扱いされたのが余程ショックだったのだろう、ついにラーデインはその場に膝を着く。

「お風呂に入ってから出直してきて下さい」

「・・・っ！」

止めにラーデインに触られた部分を掃う真似をすれば、この世の終わりの様な顔で崩れ落ちた。

「では御機嫌よう」

違う。俺は綺麗好きなんだ。本当に綺麗好きなんだ・・・とぶつぶつ何やら呟いているラーデインに背を向け歩き出しても、心が折れた彼が追ってくる気配は無い。

（彼の復活は風呂に入らないかぎり無理だろう）

第六話

どうしよう。

どうしよう。

どうしたら。

事態は考えていたより深刻かもしれない。

ラーデインは、今誰かの命令を受けて動いている。

今回は口先三寸で誤魔化し撃退したけれど、次は見逃してもらえないだろう。

ゼン様が危ない。

あいつはゼン様が私に指示を出して、自分の事を調べて回っている
と思っているから。

「急がなきゃ・・・」

最悪の事態になる前に手を打つ。そのためには情報がいる。

私は外周街から貴族街にあるユーリウス邸まで、人目を避けながら
ひたすら走った。

「あの、ゼン様・・・それで、何故私達はここにいるのでしょうか?」

またもや深夜。

しかも今度は外周街の治安が悪いことで有名な裏街道の東通。目立たない地味な恰好をした私とゼン様は、狭い建物と建物の間でこそそと身を隠していた。

「静かに。今夜ここを通るはずだ」

「一体何方が？」

「赤い糸で結ばれた運命の人が」

ダウトオオオーーーーッ!!!!!!

ちよつと、ちよつと、数行前のシリアスな前振りを返して下さい。私、ゼン様のために目茶苦茶頑張ろうとしていましたよね！？それなのに、ぴつと小指を立てて、どや顔をしないで下さいよ！何？何なの？何でうちの主は空気を読めないの。

「ら、ラーデインのことはもう宜しいのですか？」

「過去は振り返らない。俺はもう新しい恋に向かって走り出している」

ゼン様の中で終わっていても、奴の中では今も確実にホットな話題だと思っています。

「前向きな姿勢は男らしくて結構なのですが、新たな恋に走る前に過去の因縁を清算致しておきませんと・・・」

「ふむ。確かにストーカーに成られても厄介だな。分かった、今度奴を見かける事があれば斬り捨てておく」

ゼン様の頭の中でどんな脳内変換が行なわれたか解りませんが、大

変頼もしい台詞を頂きました。

最悪これなら油断していた所を、後ろからグサリ・・・なんて事態にはならないで済みそうです。

「今夜俺の守護星座と太陽星が重なる。運命の天秤は東を指した。そう恋占いに出てた」

「『恋占い』・・・そうでした。ゼン様の趣味の一つでしたよね。『占い』は」

「正確には『恋占い』だが」

人生初、男からの恋文ラブレターの次は、運命の人ですか。

二日前の出来事が私の脳裏を過ぎった。

ゼン様の部屋に食後のお茶をお持ちした時、ゼン様は机の上に規則的並べられたカードを熱心に見つめていらっしやった。

何か面白い結果でも出たのかなと、思っではいたんです。時々カードを出して、占いの真似事を行っているのは知っていたから。

でも、まさか恋占いをしていたなんて・・・。

「忘れないうちに、マリアにコレを渡しておく」

そう言っつて、黄旨る私を完全にスルーしたゼン様がテキパキした動作で懷から取り出した物は、ピンク色の縄でした。

「・・・コレは？」

「縄だ」

「縄ですね」

受け取った縄は、色以外は至って普通の、人一人捕縛するのに丁度いい長さの只の縄。

同じ物がゼン様の手にも握られている。

ピンクの縄が2セット。

「今日のラッキーアイテムだ」

「・・・」

ラッキーアイテムですか。

「ちなみにラッキーカラーは？」

「ピンクだ」

ですよ。

主は縄で私に運命の相手なる人物を問答無用で捕獲しろと言っの
これ
らうか。

渡された縄の意味を、悶々と考えていると、縄の強度を確かめてい
たゼン様がふと何かを思い出したように顔を上げた。
はいはい、今度は一体何でしょうか？

「そういえば、探し物は見つかったか」

「はい？」

「俺の書斎の机を開けただろう」

「！」

チラリとだけ向けられた視線に、肩が飛び跳ねるのを私は押さえる
ことが出来なかった。

（ばれている）

夕方、無事ユーリウス邸に帰った私は無断でゼン様の部屋を搜索し
た。

ゼン様が受け取ったラーデイン・クアからの手紙を探して。
幼い頃から長年仕えているとはいえ、無断で主の部屋を物色するなんて、許される行為じゃない。

否、主従うんぬんの前に、人として恥ずべき行為だ。

（こんなに早く見つかるなんて・・・）

つい変態発言ばかりに目がいつて、忘れがちになるがゼン様は優秀な人だった。

「首・・・ですか？」

首も覚悟の上での行動だったのに、動揺した心が声を震わせた。

「首？誰を・・・もしかして、マリアをか？何故？」

きょとんと、言葉の意味が理解できない幼子の様にゼン様が僅かに首を傾げる。

「何故って・・・」

首を傾げるゼン様に対して、逆に首を傾げる。

「俺は別に咎めているわけじゃない。マリアは必要のないことはないからな」

「！-」

曇りの無い信頼の言葉に、私は真っ赤になって俯いた。
もの凄く恥しい。

そしてもの凄く嬉しい。

（暗くて良かった。絶対に耳まで真っ赤だ）

「俺の部屋に入室出来るのは父上か母上、執事長のトラントかマリアだけ。あれだけ侵入の形跡を綺麗に消せるのは、普段から身の回りの世話をしているマリアだけだ」

慎重さが逆に仇になったなど、完全に面白がっている主。反則だと思う。

私の主で幼馴染のゼン様に私は時々こうして負かされる。

特殊な性癖のゼン様は、自分と同じ性別の男が好きで、空気をとことん読めない人で、乙男^{オトメン}で、変態で変人だ。でも私を絡め捕って離さない。

「それで見つかったのか？見つかっていなければ手伝うぞ」

「えっと、あの、はい。おかげ様で（？）見つかりました」

「そうか。で、それで俺は訊ねるべきか？一体何を探していたのか」

「・・・保留でお願いします」

「では止めておこう」

「ありがとうございます」

ゼン様の中で終わっているのなら、今更彼の話題を穿り返しても仕方がない。

もう少し情報を整理して、確証を得てからでないと駄目だ。

ラーデインがもし現れた時、一応は警戒心を持って対応してくれるのなら私からこれ以上言うべき事は無い。

コツコツコツ。

幾つか他愛の無い雑談をしていると、石畳を踏む音が夜の静寂を破った。

「（し。静かに、身を屈めて隠れろ）」

「（はい）」

（本当に誰か来た！）

建物とゼン様の体の間に隠される様にして身を縮める。

足音が二つこちらに向かつて近づいて来ていた。

ゼン様曰く運命の人が・・・。

私は緊張でドキドキしながら縄を握り締めた。

願わくば女性でありますようにと祈りながら。

『！！』

月の光がタイミングよく人影を浮き上がらせる。
まるで本当に運命のように。

「え？嘘・・・ラーディン・・・と、まさか・・・クルーガー殿下
！？」

意外すぎる人物の登場に思わず声が漏れた。

「誰だっ！誰かそこにいるのか！？」

（しまった！）

慌てて口を閉じてもう遅い。

（でもどうしてこんな所にクルーガー殿下が・・・）

月の光に照らされているのは、城下に出回っている王族の絵姿と同じ
顔。

間違い無い。

辺りを警戒するラーディンに先導されながら現れたもう一人の人物
は、我が国エテルノ王国の第五皇子『クルーガー・ド・ツヴァイ・
エテルノ』だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4646q/>

乙女な主と一流のメイドな私

2011年10月10日09時43分発行